

コード No. 22-NPF-001

提出日：令和 5 年 4 月 28 日

**「市民交流による東北アジアの平和構築事業」
令和 4 年度報告書**

KOREA こどもキャンペーン
事務局：宮西有紀

1. プログラム（事業）の目的

KOREA こどもキャンペーンは、1995 年に朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）で起きた自然災害の緊急支援のために結成された。団体の目的に、「朝鮮民主主義人民共和国のこどもたちへの持続的支援と、日朝両国の友好親善、21 世紀の東北アジアの平和構築に市民の立場として寄与すること」を掲げており、この平和構築には対話の姿勢が不可欠で、対話の場としての「市民交流」の機会を増やすこと、そこに北朝鮮を含めていくことが、現状改善の手段と考えている。

2001 年に開始した「南北コリアと日本のともだち展」は、「現場の人々との直接的なつながり」という財産を得ることができた。また、2012 年から実施してきた「日朝大学生交流」では、互いの立場に配慮しつつも、この地域の平和な未来をテーマに話し合えるほどの関係性が築かれた。2018 年以降、交流だけでなく学習会なども実施する年間プログラムへと変遷していくなかで、参加した学生が、日朝間の課題だけでなく、地域情勢や在日コリアンの存在など、より広く関心を持つようになり、こうした交流と学びが平和構築に大きく寄与するとの実感を得ている。

本事業は、20 年の活動で得た現場との信頼関係を活かし、人や物の往来も途絶え、国交が正常化されず対立関係も続く日朝関係、分断状況が続く朝鮮半島、そして、在日コリアンへのヘイトクライムがさらなる悪化の一途をたどっている日本国内において、子どもたちや若者による交流と学びの場を増やし、市民交流の意義を伝えながら、東アジア各地で平和を願う人々の輪を広げる試みである。そして、市民交流を通じて、国や政府の枠にとらわれない朝鮮半島と日本の共生社会への道筋がつくられることを目指す。

2. 主な活動内容・スケジュール

<南北コリアと日本のともだち展ふらす>

- ・オンライン絵画展 11 月 1 日～12 月 10 日
- ・対面イベント 11 月 26 日

<東アジア大学生ピースフォーラム>

- ・オリエンテーション 1 回 (6 月)
- ・オープンセミナー 1 回 (7 月)
 - 動画鑑賞会 1 回 (7 月)
- ・学習会 2 回 (8 月、1 月)
- ・フィールドワーク 2 回 (10 月、2 月)

・公開報告会

1回（3月）

年月	実施内容
6月	<p>●6/21 大学生フォーラム：オリエンテーション（オンライン）</p> <p>スピーカー：竹田響（2014-2015年日朝大学生交流参加）、新谷佑也（2015-2016年日朝大学生交流参加）、小林晴美（2015年日朝大学生交流参加）</p> <p>コメンテーター：李明哲（関西学院大学非常勤講師）</p> <p>参加学生：学部生7名、院生1名</p> <p>「日朝大学生交流」の実施が困難な状況下、過去の参加者をスピーカーに迎え、交流の経験談や当時感じたこと、それがいまはどう繋がっているのかなども聞きながら、参加者同士の交流もおこなった。</p>
7月	<p>●7/17 第1回オープンセミナー（対面）@東京</p> <p>ゲスト：安田菜津紀氏（フォトジャーナリスト）</p> <p>「父はなぜ、ルーツを隠したのか？家族の軌跡を巡る旅から見えてきたこと」</p> <p>場所：JICA 地球ひろば（東京都新宿区）</p> <p>参加数：31名</p> <p>安田氏の講演を通じて、日本で現在起きている様々な人権問題の背景となっている歴史的経緯を知る重要性を伝え、安田氏との質疑応答により、自分は何を学び、どう行動していくのかを考えるきっかけとした。</p> <p>●7/23 安田氏講演動画鑑賞会（対面）@大阪</p> <p>場所：KEY事務所（大阪市天王寺区）</p> <p>参加数：7名</p> <p>7/17に開催されたオープンセミナーの録画を関西在住のフォーラム参加者と鑑賞し、意見交換を行った。在日韓国青年連合（KEY）の金和子氏が在日コリアンの青年と共に参加し、その青年から出自をカミングアウトした時の様子などを聞くことができた。</p>
8月	<p>●8/11 第1回学習会（オンライン）</p> <p>テーマ：「過去の清算（戦後補償）」</p> <p>スピーカー：坂本陽（2018年日朝大学生交流参加）</p> <p>講師：石坂浩一（立教大学兼任講師）</p> <p>コメンテーター：米田伸次（日本ユネスコ協会連盟顧問）、今井高樹（日本国際ボランティアセンター代表理事）</p> <p>参加学生：学部生6名、院生2名</p> <p>2018年にピョンヤンの学生と対話した学生をスピーカーに迎え、当時の体験を聞きながら、賠償と補償の違い、戦後補償の概念など、日朝関係における賠償と補償について学び、日朝の認識の差を考えた。</p>
10月	<p>●10/1~2 広島フィールドワーク</p> <p>場所：広島市内</p> <p>コーディネーター：水本和実（広島市立大学名誉教授）</p> <p>講師：多賀俊介（元教員、ヒロシマピースボランティア）、豊永恵三郎（韓国の原爆被害者を救援する市民の会）、金鎮湖（広島県朝鮮人被爆者協議会理事長）</p> <p>参加学生：7名（関西4名・関東3名）+広島学生5名（*）</p> <p>*広島市立大学広島平和研究所が参加する「平和への思い事業」との共同開催。平和記念資料館や広島城跡地、平和公園内や周辺をフィールドで巡ったほか、在韓被爆者問題や朝鮮人被爆者問題について話を伺い、韓国朝鮮人被爆者問題の</p>

	背景・実態などを学んだ。
11月	<p><u>□11/1～12/10 南北コリアと日本のともだち展ぶらす「オンライン絵画展」</u> 展示数：169点 訪問数：1,084名 閲覧数：2,535回 朝鮮、韓国、中国朝鮮族、日本、在日コリアンの子どもたちから集まった「わたしのニュース」をテーマにした絵画をホームページ内の特設ページで掲載した。</p> <p><u>□11/26 南北コリアと日本のともだち展ぶらす「ともだち展の日」</u> 来場者数：61名 オンライン展示期間中に、子どもたちや支援者・協力者が集う、対面イベントを開催した。会場では、オンライン展示中の作品157点を紹介した動画の投影や、一部の作品88点の展示もおこなった。</p>
1月	<p>●1/7 第2回学習会（対面） テーマ：「謝罪」 スピーカー：宮内大河（2018–2019年日朝大学生交流参加） 講師：石坂浩一（立教大学兼任講師） 学生メンター：朴贊星（朝鮮大学校卒業生） 参加学生：学部生2名、院生3名 スピーカーに日朝大学生交流卒業生、学生メンターに朝鮮大学校出身のともだち展卒業生を迎える、「日本は謝罪したと思うか」「謝罪とは何か」について意見交換した。2019年以来、3年ぶりの対面学習会となった。</p>
2月	<p>●2/22～23 神戸フィールドワーク 場所：神戸市長田区 コーディネーター・講師：李明哲（関西学院大学非常勤講師） ゲスト講師：金信鏞（神戸コリア教育文化センター代表理事） 参加学生：8名（関西4名・関東4名） 関西でも大阪市生野区に次ぐ、在日コリアン集住地域である神戸市長田区を訪問。長田区の街の歴史とそこに関わっている在日コリアンの歴史、最近の多文化共生の取り組みなどをフィールドを巡りながら学び、また、神戸コリア教育文化センター代表理事の金信鏞氏に写真を見せていただきながら、在日コリアンの生活史や民族教育についてのお話を伺った。</p>
3月	<p>■3/11 南北コリアと日本のともだち展・大阪展 「大学生のしゃべり場」 登壇学生：学部生3名、院生2名 ファシリテーター：李明哲（関西学院大学非常勤講師） 大学生企画にフォーラムの学生が会場およびオンラインで登壇し、1年間の活動報告やそれぞれの感想を発表した。当日は、会場となった大阪国際交流センターのインターンや高校生ボランティアのほか、コリアタウンでフィールドワークをおこなっていた日本福祉大学の留学生+日本人学生10名も参加し、若者同士の交流の場にもなった。</p>

3. 助成を受けた活動の報告 (様子がわかる写真等があれば貼付してください)

□2022年度活動計画

- これまでの実績を活かした相互理解を深めるツールを準備し、それらも活用しながらより

- 多くの人々が参加する学びの場と交流の場を増やす。
- 往来が困難ななかでも北朝鮮を含めた東北アジア地域のパートナーとコミュニケーションを緊密にとり、その実践と可能性を日本社会に知らせて共感者を増やす。

コロナ禍下でも広がりを生み出せるよう、ともだち展は「ぷらす」としてオンライン展示をすることでより多くの人の目にふれる形式へ、大学生プログラムも「フォーラム」化してより広く関心層が参加しやすい方式にするなど、改善をはかった。

1) 「南北コリアと日本のともだち展ぷらす」の実施と教材づくり

オンライン絵画展には、新型コロナウイルス感染症の影響で、特に渡航が難しい朝鮮や中国からもインターネット経由で作品が届き、韓国や中国からも閲覧して感想が寄せられた。物理的・政治的な分断があっても、想いを伝えあえることを広く紹介できた。期間中には、絵を描いた子どもたちや支援者・協力者が集う対面イベントを開催した。

また、過去の作品やメッセージ等を活用した東アジアの平和構築促進を目指す「教材」づくりは、学校教育の場での利用も念頭に置いて専門家への相談を開始したが、根強い北朝鮮タブー視に加え、昨今の「ミサイル発射」多発もあり、趣旨に共感はできても学校現場での実践は難しいだろうという意見を受けたため、まずは公共教育以外の子どもたちの集う場で出来るプログラム（ワークショップ）をつくることに方向転換した。

この方針転換を受けて、教材づくりやワークショップ実施を急ぐのではなく、2022年度はまず、人脈を広げ、外部の意見を聞いて学ぶことに注力した。事務局が開発教育のセミナーやワークショップなどに参加したほか、アート教室の訪問や教材開発経験者への聞き取り、多様性を促進するワークショップの実践者とのブレーンストーミングもおこなうなど、新しい協力者と出会うことで、国際理解や多様性の視点による手法を学ぶことが出来た。

このうち、多様性を促進するワークショップの実践者とのブレーンストーミングは大阪の協力者からの紹介で3月に実施し、そこでは、「日朝、日韓などに縛られない普遍的なテーマを扱う」「多様性を体感できる仕掛けを組み込む」「多文化共生の実践のニーズがある場所で行う」といった枠組みが整理され、この枠組みに沿った国際理解ワークショップを形成していくこととなった。2023年度はこのブレーンストーミングに参加した人たちと連携していくことで合意したため、この協力者がいる大阪で試案作成や実践に向けてより具体的に動く予定である。

◎オンライン絵画展





渡航が出来ない朝鮮からも子どもたちの作品が届いた

◎対面行事「ともだち展の日」



自分の日常を絵にこめて知らせ合う



ギャラリートークでお話する海老名香葉子さん

2) 「東アジア大学生ピースフォーラム」の実施

2018 年度より実施していた「東北アジア大学生平和交流プログラム」を、「東アジア大学生ピースフォーラム」としてフォーラム化したが、2022 年度も海外との交流は難しい状況だったため、2022 年度も国内で、東アジアの平和構築に関心を持つ若者の出会いと交流の場づくりをおこなった。

2019 年を最後に中断している「日朝大学生交流」は、訪朝経験のある学生が今年度で全員卒業となるため、交流が再開してもその現場で経験や学びを同年代から継承することが難しくなる。そこで、訪朝経験者をスピーカーに招き、ピョンヤンの学生との交流のなかで出てきた実際の会話からトピックを選んで、学習会のテーマとして取り上げた。

学習会の初回では、「交流の冒頭でピョンヤンの学生に日本語を学ぶ理由を聞いた際、“賠償をもらうため”という回答があり、同じ世代なのに見えている視点が全然違うと思った」というエピソードから、「過去の清算」をテーマに日朝の認識の差を考えた。初参加の学生は、「私が今まで朝鮮民主主義人民共和国に関して学んでいたのは主に本からでした。今回のお話をお

聞きして、自分は「人と人」からの視点が欠けていると思いました。」という感想を残している。

「謝罪」をテーマにした第2回学習会では、「日本は謝罪したと思うか」について意見交換した。初参加の学生の「韓国政府は、反日を植え付けて、世論を動かしていると思う」という発言に対して、コメンテーターとして招いた朝鮮大学校出身の大学院生が「「反日」は、日本ではなく、日本帝国主義のこと」と説明し、「親日」「反日」で区別するのがおかしい」とコメントした。徴用工に関する思い違いや参加学生同士で意見のすれ違いもあったが、講師や大学院生による指摘や補足があり、同世代のメンバーが忌憚なく意見を交わせる場となった。3年ぶりの対面実施だったが、これがオンラインだったら、うまくまとめることは出来なかつただろう。

また、前述の「南北コリアと日本のともだち展」の会場では、一般にも開いた大学生企画も行われた。11月の東京対面イベントでは、「日朝大学生交流」経験者から絵画交流に参加している子どもたち、とりわけ朝鮮学校の生徒が直面する問題について知らせるべきではないかとの問題提起があり、大学生フォーラム参加学生の主導で、近年多発する在日コリアンへのヘイトクライムが悪化している現状を切り口に、日本社会の課題と向き合い、私たちは何ができるかを来場者たちで話し合う企画が実施された。3月の大阪展では、卒業する学生が4年間の振り返りを、新しい学生はこの1年の学びを発表した。このなかで、初めてフォーラムに参加した学生（1年生）は、印象に残った活動として広島フィールドワークを挙げ、その理由を「日本人は被害者という固定観念があったが、在韓被爆者や在朝被爆者について学ぶなかで日本人以外にも被爆者がいる現実を知り、“果たして日本は唯一の被爆国といえるのか”という疑問を持つことができた」と話した。

◎オープニングセミナー

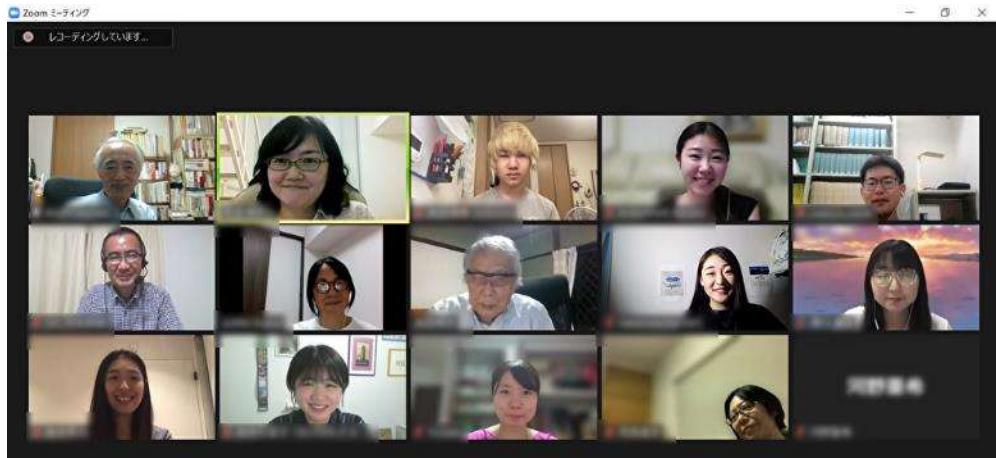


安田菜津紀さんは、最後に「いま必要なのは、もっと血が通った人間の話をしようという呼びかけと、直接的な出会い」と締めくくった



在日コリアンの青年の話に、自身の経験も踏まえて思いを語るフォーラムの学生

◎学習会



訪朝経験のない新しい学生から、交流の際の留意点に関する質問も出た第1回学習会では、複数の交流経験者が自身の経験を踏まえ、まずは「ともだちとして接する」視点を持って交流することの必要性を説いていた



3年ぶりの対面となった第2回学習会では、オンライン時よりも積極的に意見が飛び交った

◎フィールドワーク



在韓被爆者や在朝被爆者問題から、“原爆”を“日本の被害”という一点ではなく、“日本の加害性”という視点からも考えた広島フィールドワーク

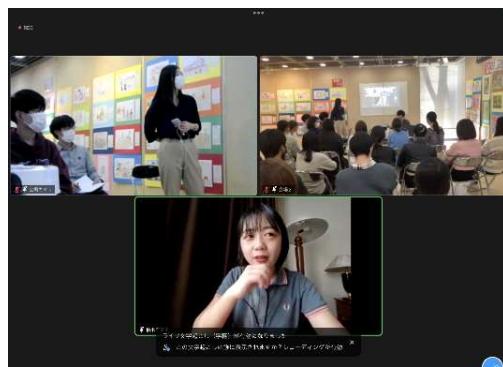


神戸の在日コリアン集住地域を訪れるのは初めてという関西の学生もいた

◎ともだち展での大学生企画



東京：朝鮮学校卒業生が現状を報告



大阪：進路に影響を与えた経験を話す学生

4. 活動の成果（成果物などがありましたらご紹介ください）

1) 学びの機会から「自分の考えをつかむ」学生

「東アジア大学生ピースフォーラム」では、若者たちの出会いと交流、そして、歴史を学ぶなかで、自分の考えをつかむための「場づくり」をおこなっている。

そうしたなか、参加した学生たちは、これまで知る機会のなかった日本の加害の歴史を学び、葛藤しながらも考えを深めて自分なりの回答を見つけ進路へと繋げている。2019年に訪朝した学生は、帰国後に参加した川崎フィールドワークで、制度的差別と川崎を中心とした市民運動の歴史を学ぶとともに在日 1 世のヘイトスピーチへの想いを聞き、「ヘイトスピーチの問題も行政の立場から解決できるのでは」と思い、公務員を目指すようになった。彼女は、この 4 月、念願の公務員として就職した。

また、広島フィールドワークが自身に大きな影響を与えたという今年度の新規参加学生（前出）は、「日本は被爆した被害者側ではあるが、そのときに植民地支配をしていた国の人々もいたことから“加害性”も加わってくる。こうした“別の側面から見る”視点を持つことができた。今後、4 年間学ぶにあたって、“日本の加害性に向き合う”姿勢の基礎を広島フィールドワークで身に着けた」と話してくれた。

この 3 年間、ピョンヤンの学生との交流はかなわなかったが、参加者たちは学習会だけでなくともだち展の場、さらには YouTube 番組（8bit news による「月刊 JVC」）などにも出演して、自身の学びを語ったり発表したりしている。まだ数は少ないかもしれないが、彼らの話を聞いた番組視聴者や絵画展参加者には一石を投じているといえよう。

大阪展の場で大学生たちの発表を聞いた高校生たちは、この4月の大学生となり、新たに本フォーラムの一員となる予定である。

2) サポーターとの連携

広島フィールドワークは広島市立大学名誉教授水本和実氏、神戸フィールドワークでは関西学院大学非常勤講師の李明哲氏がコーディネートを担い、学習会では立教大学兼任講師の石坂浩一氏による講義など、「日朝大学生交流」や前事業からのネットワークを活かし、大学教員に常に相談して具体的な助言をいただける関係性を築きつつあることは強みと言ってもいい。

また、韓国へ学生を引率する経験が豊富な石坂浩一氏には、韓国でのプログラムを相談できたり、参加学生との年齢が近い李明哲氏からのフィードバックは、学生にも大きな影響を与えるなど、事務局や学生にとっても大きな力となっている。

引き続き、サポーターとは密に連携を取って、助言を本事業に反映していきたい。

5. 今後の課題

「海外」、特に韓国は、K-POP 人気などによって身近になり、「留学」という進学を選ぶ若者も増えている。その様な状況のなかで、新しい参加学生を得ていくためには、学生たちにとってより魅力的で、学びの多いプログラムを策定していくことが求められる。

また、多様な参加者との意見交換によって学びを深めていくことを目指しているが、一方で、ビギナー、リピーター、大学院生、在日コリアン学生など多様な学生たちが集まる中で、それぞれの知識レベルの差にどのように対応していくかも考えなければならない。

以上